

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻・ 博士課程後期4年次	浅井優一	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・教授	小山亘	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 1名
研究課題名	現代フィジー社会における環境保護と再伝統化言説に関する言語人類学的考察		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2011	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、フィジー諸島共和国ダワサム地域で共起する3つの事象；①キリスト教ペンテコステ派一群による、フィジー伝統儀礼用具の焼却事件（2005年）、②FLMMA (Fiji Locally-Managed Marine Area) と呼ばれる、南太平洋大学とダワサム地域との協働で実施されている沿岸資源管理活動の導入（2007年）、③地域の首長を新たに即位させる儀礼の開催（2010年）を取り上げ、それらの事象に通底して観察される、解釈の枠組み、オセアニア人類学において「カーゴ・カルト」、「災因論」など呼ばれてきたイデオロギー的現象の内実を、社会記号論系言語人類学に依拠して解明し、現代フィジー社会を特徴付ける社会文化的現象／言説空間における「環境保護」について考察するものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[言語人類学] [環境] [フィジー]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2011 年度の特別重点資金によって、申請者は、2011 年 11 月下旬から 2012 年 1 月初旬にかけて、フィジー諸島共和国におけるスヴァ市・ダワサム地域を中心に、研究概要における 2 つ目の点に焦点化した調査を行った。以下、その調査事項と成果内容についての概説を付す。

【調査事項】：FLMMA (Fiji Locally-Managed Marine Area; フィジー沿岸資源管理活動)

- 1) スヴァ市にある南太平洋大学の IAS (University of the South Pacific/the Institute of Applied Science) にて、ダワサム地域で FLMMA についてのワークショップを主催した研究員へのインタビュー、ワークショップ資料の収集を行い、南太平洋大学の IAS による、FLMMA 実施の利点に関する地域住民へ説明の様子、IAS が当該地域に対して漁の禁止を命じた海域、当該地域に FLMMA の活動が導入された経緯などに関する、研究成果を得ることができた。
- 2) ダワサム地域での参与観察、長老等を対象としたインタビューなどを実施し、当該地域住民側による FLMMA 導入の利点についての解釈、導入後にダワサム地域で起きた後の是非に関する論議、「コミュニティ・ベース」や「住民の主体的参加」、「持続可能性」などの活動理念が、どのように解釈されるに至ったのか、FLMMA 導入後に当該地域で発生した出来事について、研究成果を得ることができた。

【成果内容】

ダワサム地域で、IAS による沿岸水産資源・生態系管理活動の実施に関する話し合いが始まったのは、2005 年頃である。当時、当該地域では、沿岸での漁に際し、数十メートルにも及ぶ網を利用して捕獲するのは、比較的大きな魚のみで、網にかかった小さな魚は浜辺で捨てられていた。また、魚に対して殺傷作用がある薬などを沿岸にまき、水面に浮かび上がった魚を捕獲するなどの漁業法も比較的頻繁に活用されていた。そうした状況下、IAS 研究員であり、当該地域のドゥリティ (Driti) 村出身である I.W.氏は、当該地域で FLMMA の沿岸資源管理活動が導入されることの重要性を強く感じ、2006 年に I.W.氏と、その他 IAS のメンバー 4 名によって、ダワサム地域住民に向けた、沿岸資源管理/保護の重要性についての意識啓発・教育を目的としたワークショップを、シラナ (Silana) 村において 3 日間開催した。ワークショップには、ダワサム地域にあるほぼ全ての村落の長老等が招待され、魚の産卵周期や幼稚子の成長期間の長さ、漁によるサンゴの破壊、持続可能な沿岸資源管理の在り方などが説明された。そして、特定の海域を「ノーテイクゾーン」として漁を禁止し、一定期間保護することによって生まれる「スピルオーバー効果」が、海域全体での漁獲高を結果的に上昇させること、それによって「持続可能な」沿岸資源利用が可能になることが訴えられた。その結果、同地域のシラナ村が同活動を行うことを決定した。

その後、3 年間にわたり IAS とシラナ村住民が協働で行っていたモニタリング調査では、ノーテイクゾーンの魚数は年々増加していたという。これに手応えを感じたシラナ村落住民は、活動に意欲的に取り組んでいたという。活動の継続に関する意志決定は、村落側が握っているが、IAS 側は、海域を継続して閉じておくことを強く奨励していた。しかし、2010 年 1 月に、シラナ村でノーテイクゾーンでの漁が解禁された。解禁理由は「村落の子供たちの小学校入学祝い」というものであった。シラナ村で漁が解禁されたという知らせは、瞬く間に隣接村落へと拡大し、知らせを聞いた他村の多くの女性が、昼夜を問わず一斉に漁を行った。この状況を見て、その後シラナ村の長老たちは、2 週間ほど漁を解禁した後、再びその海域を閉じることを決定した。FLMMA の活動は「コミュニティ・ベース」を理念の一つとして掲げ、最終的な意志決定を村落側に委ねているため、IAS は村落側の決定を尊重せざるをえない。しかし、この出来事が起きた後、IAS はシラナ村で同様の行為が再発する可能性があること、沿岸生態系の変化、社会経済的効果の追跡調査の困難を理由に、シラナ村に対し漁を解禁したことについての反省を促すと共に、IAS の地域沿岸資源モニタリング拠点を、シラナ村から隣村ナタレイラ (Nataleira) 村に移転した。

この事例は、FLMMA の資源管理活動 (環境保護運動) に関する幾つかの課題を提起した。一つは、「コミュニティ・ベース」という視座についてである。それぞれの村落は、地理的にも隣村に開かれており、当然村人たちは、日常的にその境界を行き来している。また、フィジーでは通常、隣村同士は、ほぼ全ての成員同士が何らかの親族関係を持っている。例えば、今日、シラナ村とナタレイラ村の間では婚姻が盛んだが、フィジーでは自らの母親の出身村やその村落住民を「ヴァス (vasu)」と呼び、自らは「ヴァス」に対して社会的優位性を有する。そして、その村落 (母親の出身村) において、あるいは母親の所属する親族集団の成員に対しては、所有物を奪うなどといった、通常は慎まれる行為が「ヴァス」であることを理由に許容されることがある。そうした背景に照らした場合、シラナ村出身の母親を持つナタレイラ村住民にとっては、シラナ村は自らの村落同然として捉えられる。また、シラナ村からナタレイラ村に嫁いだ女性たちにとっても、シラナ村は当然自らの村であるし、シラナ村住民にとっても同様のことがナタレイラ村に対して言える。

研究成果の概要 つづき

したがって、当該両村落は、地理的・社会文化的境界が極めて不明瞭であり、姻戚関係を伝え、隣村での漁も全く問題なく行える状況が日常的に存在している。実際に、シラナ村が漁を解禁した際、そこで漁を行った女性の多くは、隣村(ナタレイラ村など)からやってきたという。つまり、この事例から明らかなように「地域コミュニティ」は、境界付け可能な閉じた共同体ではなく、地理的・社会的に、隣村などの広範な地域を含んだ、多様な形をとっている。一村の出来事が当該村落だけでは完結しえない状況があるとすれば、当然、村落単位に基づいて概念化される「コミュニティ」という当該活動の考え方そのものが問い直されなければならない。

もう一つは、「(主体的)参加」という視座についてである。「伝統的」にフィジーの村落では首長などの死に際し、その喪を示すために特定海域への侵入やそこでの漁を一定期間禁止し、喪の終了と共に漁を解禁して、そこで獲れる魚を食し祝祭を演出する、儀礼的行為が営まれていた。シラナ村が子供たちの「入学祝い」のため、数年間保護してきたノーテイクゾーンでの漁を解禁したことは、それに類似した儀礼的習慣であったと考えられる。地域の生活形態に合わせて漁を解禁し、2週間程度の後、再度漁を禁止したというシラナ村の行為は、地域コミュニティの「主体的参加」や、それによる「生活向上」、その意味において FLMMA の活動理念を「理想的」な形で反映したものであったとさえ言える。しかし、このシラナ村の行為は、IAS 側が考える持続可能性を達成する上では、望ましい行為ではなかった。IAS 側は、地域コミュニティの「主体的参加」よりも、沿岸生態系保護に活動の主眼を置いていたからである。言い換えれば、IAS にとって、住民の「主体的参加」による「生活向上」は、「沿岸生態系保護の実施」と同義であるから重要なものであり、IAS の活動は、この2つが同義であることを実証する「科学的」データや事例の収集自体を目的とした活動という、やや屈折した状態にあると考えられる。

実際には、「沿岸生態系保護の実施」と「生活向上」の相関関係は、過去に他地域において実施された、住民の経済状況に関わる(極めて簡素な)アンケートと、年に一度行われる水中での目視による魚数調査に依拠した、曖昧な数値(統計)でしか提示されていない。そこでは、個々の地域村落における社会文化的コンテキストが、多角測量的に検証されることは全くなく、したがって、そこで算出された数値(統計、相関)自体が、活動提唱者側の解釈枠組みに依拠して造られた事実、イデオロギー性を帯びたデータである可能性はやや否定し難い。しかし、IAS などの研究機関によって、「沿岸生態系保護の実施」と「生活向上」の相関関係がデータとして数値・統計化(可視化)されると、それが沿岸資源管理の「成功事例」として、あたかも「環境保全」と「生活向上」の間に実質的な関係、「科学的」調査に基づいた正の相関関係があるかのように既成事実化され、「理想的」な活動実施枠組みとなって、「ネットワーク」を通じて広く他地域での活動主体へと駆け巡っている。そして、このような「成功事例」を、様々な地域において実践し、(半ば闇雲に)普及すること、「理想型」に地域コミュニティをはめ込むこと(教育し、矯正/強制すること)、これが「コミュニティの主体的参加」の意味するところとなっている現状がある。

その意味において、地域コミュニティの「主体的な参加」とは、研究組織・大学側の調査研究への「従属的な参加」(形式的な参加)である。地域コミュニティ側が考える意味での「主体的な参加」は、環境保全(を実証するデータ採取)に結びつかない場合、「失敗事例」としてカテゴリー化され、大学側にとっては望ましくない。シラナ村に続き、ナタレイラ村もノーテイクゾーンでの漁を解禁した場合、IAS は地域と協働で行っていた資源管理活動と、そのモニタリング調査を打ち切り、ダワサム地域から撤退するのであろうか。ここでは何をもって「コミュニティ」、その「主体的な参加」とするのか、誰にとっての「持続可能性」なのか、「コミュニティ」、「参加」、そして「持続可能性」という概念自体の解釈が、大学側と地域コミュニティの間で乖離しているという現状がある。つまり、FLMMA/IAS による沿岸資源管理活動における活動の成功/失敗の解釈自体が、大学や活動推進者側の特定のコンテキストに依拠したイデオロギーを強く反映したものとなっている。そして、より根本的には、成功/失敗の如何に関わらず、沿岸資源管理活動の実施によって、特定の場所、人々の生活・社会的コンテキストが、著しく変化してしまうことには、あまり意識が向けられることがないことも明らかとなった。

今後は、こうした環境保護の言説が、これまで調査を行ってきたその他の文化的事象と、どのようなコンテキスト的結びつきを示すのかについて、明らかにすることを計画している。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

【雑誌論文】

- ① 浅井優一 「首長再生と悪魔排除：フィジーにおける神話化過程としての首長制」『アジア・アフリカ言語文化研究』84号、2012年9月、アジア・アフリカ言語文化研究所。掲載決定。
- ② 綾部保志・浅井優一 「英語教育と異文化教育：文化相対主義から反＝反相対主義へ」『研究報告 No.76 自立した学習者を育てる英語教育の探求：小中高大を接続することばの教育として』2012年、中央教育研究所。印刷中。
- ③ 浅井優一 「＜書評＞近代言語イデオロギー論：記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史」『異文化コミュニケーション論集』10号、pp. 113-118、2012年、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科。

【図書】

- ① 浅井優一・野村康 「第10章 フィジー：環境保護、コミュニティ、文化的多様性」阿部治・田中治彦 (編) 『アジア・太平洋におけるESD』明石書店、pp. 288-313、2012年、印刷中。
- ② 浅井優一 (訳) 「スコット・スロヴィック (著) / 自然記述の多様性：ネイチャーライティングから環境文学まで」鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 (共編) 『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房、pp.168-186、2011年。

【学会発表】

- ① Yuichi Asai “Environmental Discourse as Poetry: Nature Interpretation Ritual in a Japanese Eco-Institute.” Workshop: *Linguistic and semiotic anthropology: Contributions to the twenty-first century*. 12th European Association of Social Anthropologists Biennial Conference: *Uncertainty and Disquiet*. At Nanterre, France. July 10-13th, 2012
- ② 浅井優一 「誰が＜ラトゥ＞を連れてきたのか」日本文化人類学会第46回研究大会。2012年6月23日(土) 於：広島大学。
- ③ 浅井優一 「フィジーにおける神話の再解釈と首長即位儀礼」日本オセアニア学会第29回研究大会。2012年3月24日(土) 於：倉敷市芸文館。
- ④ Yuichi Asai “Result Presentation of ESDRC and Exchange Meeting on ESD”, held at JICA Fiji Office with University of the South Pacific, Secretariat of the Pacific Regional Environmental Programme (SPREP), and Live & Learn Fiji, in December 2nd, 2011 (13:30-17:30). Yuichi Asai participated in the meeting as a critical commentator.

【その他】

- ① 浅井優一 「出来事モデル」石井敏・久米昭元・浅井亜紀子・伊藤明美・久保田真弓・清ルミ・古家聡 (編) 『異文化コミュニケーション事典』春風社、2012年、刊行予定。